

## 政治学概論 II 2024 w5-7 (2月4日) 授業の感想

氏名	Q1	Q2
赤星	『存在のない子供たち』の映画	この作品で時々出てきた登場人物の行動に対する動機を述べる場面で、それらのほとんどが環境的要因によるものであることが印象的だったから。その中でも特に、主人公の妹と結婚した男性の証言で11歳の女性との結婚や出産は普通に考えればおかしいことだけれど、その地域ではそれが常態化していて、当の本人もおかしいとは思わなかったというのが、一番身近にありそうだと思った。
岩田	「存在のない子供たち」のゼインが親に育てられないなら子供を産むなといったこと。	日本では子どもを育てるのにはお金がかかるから子どもを生めないという人が多いが、貧困国では子どもがたくさんいて、幼いうちから働かせられたり結婚させられたりしている。貧困国ではお金がないから子どもを生むという考え方であるところが日本と大きく異なると感じ、稼ごうために子どもが利用されていることに胸が痛くなった。裁判の場面で、ゼインが両親に対し「僕を生んだ罪」で起訴していることや、両親自身も身分証がなく生きるためには仕方がなかったということなどから、このような現状にしまっている世界そのものを訴えているように感じた。また、裁判官は両者の感情を無視して事実だけで判断しても現状は変わらないし、両者に感情移入してばかりいても一向に判決を出せないため、心があってもなくてもできない仕事であると感じ、さらにこの問題については世界にもっと発信して世界中で解決に向けて考えていかなくてはならないと考える。
内坂	私が面白いと思った箇所はステレオタイプについてだ。	ステレオタイプは政治にも利用されるという部分が印象に残ったからだ。ナチスによるユダヤ人への偏見の利用が、ステレオタイプが政治に利用された一例であると学んだ。人々の思い込みは覆すことが難しい。だからこそ為政者や指導者が、ステレオタイプを利用して人々を誘導することで、人々の思いが一層強まって強固な支持者層を作ることができるのではないかと感じた。
宇名手	貧困などの国際問題は誰が解決すべきか	映画を視聴して、あまり身近には感じることもない貧困や不法就労などの問題について考えたときに、人々がなぜそのような状況に陥ることになったのかを明らかにすることがまずは必要なのではないかと感じた。母国での紛争などから逃れてきた難民の多くがこのような問題に巻き込まれていると考えると、誰が解決すべきか難しい話であるように感じた。
遠藤	国際政治を見るときに非公開情報が多くステレオタイプを持ったまま推論してしまっていることが重要な点だと思った。	外交文書の公開が30年であることでリアルタイムな情報から分析して考えることができないが、これまで見たたり聞いたことと認知の枠組みを結び付けて受け入れたり、バイアスがかかったまま推論したりして国際政治を見ていることがある。しかし、それは研究者のアプローチのように理論としてあてはめて考えることができるということであり、そのことを意識しておくことが大切になると感じたから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
大石	秘密文書の取り扱いについて面白さを感じた。	私自身秘密文書は永遠に世の中に公開されないものなのだと思っていたので、今回の講義でおよそ 30 年後になると各国の当時の考え方の違いや報道されていた内容の真相が答え合わせできると知り、とても驚いたから。また秘密文書を読みながら適宜教員となったとき授業に用いることで子どもたちが歴史の事象になんとなく大まかに学習するのではなく実感を持って学習できると思い、指導の可能性を感じたから。
大久保	存在のない子どもたち	本映画を視聴し、子どもも自分の見ている範囲の中で自分が正しいと思って行動に必死になっているし、親は親で生きていくために必死になっていて、どちらもまわりを見ることができていなく、生きるために必死になっていると思った。また、最後の証明写真を撮るシーンのときに放った笑顔がこの映画の中で最初で最後の笑顔なのではないかと思ひ、映画全体的に見て、報われないシーンが多かったが、ここで一筋の光を見れたような気がして、良かったのではないかと思った。この映画を受けて、映画のような問題を解決していこうとしても、その実情を知らない人たちからすると触れられないところでなかなか表に出にくいから、手をさしのべることができないし、他国との影響が絡んでくるとそこを解決していくのは非常に難しいと思った。
片山	思考の単純化のところ	ワクチンや能登の地震などで、人類削減や人工地震とかたくさん陰謀論があった。全部が全部嘘とかおかしい話とか言うつもりはないし、それを言っている人を批判するつもりもないが、中には、客観性を欠いていたり、災害や被害者を利用して話の正当性を持たせようとしているのモノも多いので、非常に腹立たしいものもある。しかし、非公開情報も多いし、人間はステレオタイプやバイアスからは抜け出しにくい。なので、リテラシーは大事だと思うし、自分が教師になったら、生徒にはリテラシーを持って、情報媒体に触れられるような人になってほしいと思うので、それを身に着けられるような授業をしたいと思った。じぶんは、今回の授業で、思考の単純化は特に気をつけないといけないと思ったし、重大な問題だと思った。
加藤	国家間関係のロシア・ウクライナ戦争	ロシア・ウクライナ戦争による直接的な影響は、戦争に巻き込まれた民間人の犠牲が挙げられる。それによって、避難民が生まれ、隣国を含む諸国には難民が急増し、これを受け入れるための支援が必要になっている。私たちの生活との関連性については、戦争によるエネルギー価格の高騰や供給の不安定さによる生活への影響が挙げられる。他にも、国連およびNATOなどの国際機関の対応や情報戦による国際的なセキュリティの対策課題が生じている。このように、ロシア・ウクライナ戦争による影響は直接的なものだけでなく、世界各国にも影響を与えていることが分かる。したがって、私たちの生活においても重要なトピックだと考えたからである。

(continued)

氏名	Q1	Q2
喜多川	思考の単純化について	思考の単純化における陰謀論の説明の中で、誰が最も利益を得るのかを基軸とした推論であり、一見合理的な思考に見えることから常識を疑う人ほどはまりやすい説明があり、自分に当てはまるところが多いと感じたことから、面白い内容だと思った。また、すでにある認識枠組みで物事を見ってしまうことも共通していたので、先入観をもたず見てから定義するように物事を見たいと思ったから。
黒田	存在のない子どもたち	最初は、12歳なのに人を刺した少年を恐ろしいと感じたけれど、その少年の育ってきた環境、経験してきた出来事を知った後は、少年の行動は必然的なものであると感じた。映画の中で、少年は荒々しい所もあるがとても心優しく面倒見の良い性格で、彼の周りの環境がどうしようもない程に酷い環境でも、必死に自分や周りの人を生かそうと、幸せにしようとする姿に心が苦しくなったから。自分の今の生き方、そして世界で今どんなことが起きているのか、真実を知っていかなければならないと感じた。
小松原（暖）	主権国家体制	大国の利益が優先され、大国の利益を棄損しない国際問題は放置されるという点について、南北問題や安保理の常任理事国が拒否権を持っていることなどを想起した。環境問題や核の問題などに対して、大国は小国の目の前の利益を無視した政策を施行している。このような点から、平等に見えて平等でないということが分かり、どのようにしたら本来の平等の関係になるのか考えることは重要になるのではないかと感じた。
高橋	鑑賞した映画の内容が重要だと思った。	映画鑑賞を通して、少女の強制結婚や不法就労ならびに少年の殺人未遂行為など大きな問題が山積している実態が詳細に描かれていたが、世界中、その中でも特に発展途上国ではこのような実態が当然のように内在化している状況に衝撃を受けた。だからと言って、これらの問題を解決するために国が国内に住む人々全員の戸籍や身辺に関するデータを徹底的に把握し管理することが、かえって一部の人々の今まで何とか繋いできた生命や生活を奪うことになるという深刻な現実が待ち構えている。私は本映画の中でもとりわけ主人公の少年が人を刺した場面が強烈に印象に残っている。その理由はこの事件をきっかけに少年が身分証を持っていない事実や母親が息子と引き離されている事実が公に明るみになったことで、最後に無事少年は身分証を作成し、母親は息子を取り戻すことができたという明るい結末を迎えた。しかし、逆を言えばこれ程までの出来事が起きないと、これらの事実は闇の中に葬られ、一切解決されることなく終わるという実情が当たり前の世の中に愕然としたからである。
田辺	国際社会の諸問題の特徴「数多くの非公開情報」	日本の外交文書が30年後に公開されることを知った。実際に、国際問題に直面しているときには外交の情報は重要性が高く機密となっている。そのため、研究者は問題が起きている当時その問題を推論することしかできない。このような「数多くの非公開情報」という国際問題の特徴は、その問題の解決に向けたアプローチを妨げていると思われる。また数多くの情報が非公開であることによって、人々は限られた情報のなかでしか問題を捉えることができず、それが相まって問題をステレオタイプな認知枠組みで捉えやすくなっているのではないかと考えた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
爲石（康）	ステレオタイプ	ステレオタイプは、日常に潜むものであると考えていたが政治にも利用されていたことがわかった。ステレオタイプを利用することで強力な一種の洗脳のような政治を行うことができる。逆に今の日本は、国民のステレオタイプに逆行する政治を行っているように思えたので興味を持った。
為石（智）	陰謀論が軍備競争を正当化すること	アポロ11号が月面に着陸した際、冷戦時代における米ソ競争に勝つために、アメリカが月面着陸を偽造したとする陰謀論がある。また、ソ連の軍拡に対するアメリカの反応は、ソ連は世界を支配するために計画的に動いているというものでもあった。このように、自国を守るための軍拡が相手の立場で都合よく解釈されてしまう陰謀論は、機密性の高い政治において脅威となることがあることが興味深いと思った。
丹後	存在のない子どもたち	今回の授業では主に国際政治についての授業であったが、それらなの内容を学んだ上で、「存在のない子どもたち」を見たことによって、このようなことが現在でも現実で起きているということを改めて実感させられる映画であったから。そして、これらの問題をどこが対処するのかが国際的に見ても曖昧であるという現状がとても伝わってきたと思う。改めて、これらの問題に対してもはっきりとした対処や国際法などの制定などが必要であるなど感じた。
富谷	映画の子どもが身分証を持っていないシーン	国内の法律や社会制度が機能していないわけではないが、その法律や社会制度が広い範囲で用いられていないというシーンが多くあったため。また、最後に子供が育てることができないのであれば子供を産むなど主張するシーンがあったが、国内制度が整っていればあのような発言や考えは出てこなかったのかなと考えた。
西田	映画	映画の最初の方は娘を手放したり、ゼインを学校に通わせたりしない親たちが悪者に見え、不幸の原因のように見えた。しかし、話が進んでいくにつれて、ゼインら子ども達だけでなく父にも身分証がない様子や酷い扱いを受けていた様子が見られ、生きていくためには娘を手放したり、学校に通わせず働かせたりするしかなかったのではないかと感じた。このようなことから不幸の原因は親にあるのではなく、親から子へと続く不幸の連鎖を止められない社会にあると考えた。
丹羽	安全保障のジレンマ	「ある国の軍備が他国に脅威感と呼び起こす」という安全保障のジレンマの内容が印象的だったので、この言葉を選んだ。授業で提示された解決策の中には、歴史上で残酷さを極めていたヒトラー帝国等の「世界国家の設立」も挙げられていた。自分は、「国際機構の設立」が無難だと考えていたが、公的な理由を基にして軍備拡張を進める国が現れてしまうとも感じた。
野田	アームズコントロールが世界で行われていることについて	軍事的な衝突を避けるために軍事的な手段を用いて緊張緩和を図ることが本当に有効なのかどうか疑問点である。軍事的手段はあくまで軍事的手段にすぎず、話し合いなどの方法を用いるのが一番平和的ではあると思う。しかし、そうならない世界には複雑な事情が絡み合っており、立場が違えば主張が異なることもあるので、難しい問題であると思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
原田	思考の単純化 陰謀論	陰謀論では一見、合理的な思考に見えたり先入観を投影しやすいなど陰謀論を支持する人は決して少なくないということを知り、よく考えもせず目先の分かりやすい思考を支持してしまうことが原因の一つでもあるのかなと思い面白いと感じた。また、陰謀論では一つの説明だけで全てが説明できているような気になってしまうという講義の中の説明から、国際問題の要因は複雑であり単純ではないということを見逃してしまっているということが問題でもあると感じ、重要であるとも感じた。
藤井	中立政策は「中立」を意味しない。	これまで中立政策をとれば中立国として様々な争いとは無縁になり、平和を維持できるようになると思込んでいたが、中立国になるということは国際秩序を揺るがせ、力関係を変化させる危険な手段でもあることを授業を通して気付くことができ、印象に残ったため選んだ。特に、日本は東アジアの力関係に大きな影響力を及ぼすため、安易に中立政策をとってはならないことを学ぶことができた。
藤田	複数国家にまたがる非政治的・経済的諸問題について	環境問題や難民問題、公衆衛生問題などは一国の状況や判断で決めることは難しく、複数の国家にまたがる問題であるが、多くの国が関わっている問題であるからこそ当事者意識が生まれにくく問題解決に時間がかかってしまうということに深く納得できたから。最近でいうとトランプがWHOを離脱したり、パリ協定の離脱をしたことなどが挙げられるが、世界をリードする国が問題意識を持たずに自国の利益だけを優先してしまうと問題をさらに深刻化させてしまう。しかし、なかなか当事者意識を持っていない国が多い。問題を可能な限り深刻化させないためにも、1人1人が問題のことを理解し、国や世界に向けて声をあげることで、問題意識がない国に危機感を与えることが必要であると考えた。
本間	ステレオタイプについて	政治家や政党の考えを評価する際には、肯定的な評価でも否定的でも、自分が知っている概念やバイアスの中でしか評価できないことを学んだ。日本では、政治や宗教に対する考えを述べるのがタブーとされがちであるが、政治的な問題への興味関心を高めていくためには、教師もある程度意見を主張していくことは重要であると考えた。講義全体を通して、教師は意見を述べることを否定的に考えるのではなく、誰であっても自分の中にある概念やバイアスを基に政治を評価していることを伝え、認識させていくことが重要であると感じた。
三島	君主論、映画鑑賞での移民や貧困の問題	『君主論』が印象的だった理由は、その現実主義的な視点にある。マキアヴェッリは理想ではなく、実際の政治のあり方を率直に描き、君主が権力を維持するためには時に非道な手段も必要だと説いている。その考えは一見冷酷に思えるが、歴史を振り返ると現実には即したものだと感じた。また、道徳よりも結果を重視する姿勢は、現代社会にも通じる部分があり、政治やリーダーシップを考える上で示唆に富んでいると感じたからである。また、映画鑑賞での移民問題は、日本が欧米のように積極的に移民を受け入れる制度がなく、言語の壁もあるので身近にはない問題で興味深く感じた。政府がどのようにこの問題を解決していくかが鍵であると分かった。